



未来に向かって

未来はきっと面白くなる

青年技術士協議会 副会長
技術士（建設部門）

正 岡 久 明

1. はじめに

技術者の日常は制約との戦いである。

大きな問題や制約に直面したとき、柔軟な発想とアイデアが求められるがそれがとても難しい。でもさらに難しいのは全く制約事項がないときである。

本号のテーマは「哲学なき技術者は去れ」、その中で私のパートは「未来に向かって」ということである。未来を思い描くということは、ある意味、制約事項は何もないわけで、この大きなテーマを前にして、投稿の依頼を受けてからずいぶんと時間が経過したが、筆（キーボード）は一向にすすまない。

2. 鉄腕アトムの日

そのような中『鉄腕アトム』（原作手塚治虫）の誕生日（2003年4月7日）があった。ご存知、『鉄腕アトム』は、1963年に初の国産アニメとしてテレビ放映された40年後の未来描いた漫画である。私の生年も1963年なので、子供の頃見た『鉄腕アトム』は再放送だと思うが、子供ながらに『鉄腕アトム』の世界は、到底実現しないだろうまさにマンガ（夢物語）だと思っていた。

3. 実現したこと

鉄腕アトムの誕生日にあわせて、『鉄腕アトム』の世界がどこまで実現したかという特集がなされていた。何とそのほとんどが既に実現されているということで、あらためて手塚治虫の想像力と科学技術の進展のすごさに驚かされた。なお現在、唯一実現されていないものは、主人公の鉄腕アトム自身くらいということだが、ホンダは2足歩行のヒューマノイド

ロボット ASIMO を開発し、さらに最近はレンタル事業も開始したということで、近い将来、アトムのようなロボットも身近になるのであろう。

4. 変革の時代

時代は、量から質へ、組織から個人へ、画一から多様へ、対立から対話へ、中央から地方へなど確実に変化している。しかし、これら社会の変化の大きさやスピードに対して、わたし自身、ともすれば鈍感になっていたことを、鉄腕アトムの特集によって思い知らされた。そして「思い描いたこと（未来）は必ず実現する。」ということをあらためて実感した。

では、北海道の未来に思いを馳せるにあたり、ポイントとなる北海道人の気質、および技術士の果たす役割と可能性について考察する。

5. 民族の特性

人類は「農耕民族」と「狩猟民族」に大別され、その民族独特の性質を持つということで、木村尚三郎氏の著書¹⁾の中では、欧米人は狩猟民族で、日本人は代表的な農耕民族であると紹介している。

狩猟民族は隣の人と同じことをやっていると獲物にありつけないため個人主義性と独自性が発達している。一方、農耕民族は、気候に合わせて周りの人と一緒に時期に種を蒔き、そして収穫するため集団性が高く、かつ、自分の意志の及ばない気候に左右されて不作になることもあるため、忍耐性が高いということである。

6. 国旗をみれば民族性がわかる

もうひとつ民族性にまつわる話として、「農耕民

族」の国旗は、作物の恵みにもとである「太陽」をモチーフにしている、「狩猟民族」の国旗は狩猟の際に自分の位置や目標方向を見定める指標の「星」をモチーフにしているということを聞いたことがある。

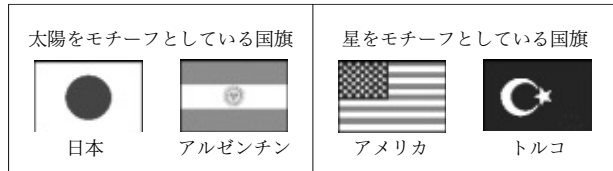


図 国旗のデザインモチーフ

7. 変革の時代に真価を発揮する北海道人

「農耕民族」といわれる日本の中であって、北海道は何かと「星」に縁があり、ひそかに北海道人は「狩猟民族」では、と思っている。その根拠をいくつか挙げると、道章の七光星²⁾、赤レンガ庁舎の屋根に設けられた窓の赤い五芒星、函館五稜郭公園の星形城郭、もうひとつ事例を挙げるとサッポロビール社のシンボルも星のマークを開拓者精神のシンボルとして使っている。

つまり北海道人は、農耕民族の持つ集団性や忍耐性に加えて、狩猟民族の持つ個人主義性と独自性をあわせ持ち、変革の時代に真価を発揮する気質を有していると言えるのではないだろうか。

8. 人と人のネットワークが無限の価値を生む

歴史の中で、ある時代の終わり告げると同時に、新しい生活様式や価値観をもたらした大きな三つの革命（転換点）がある。

第一は、狩猟と採取から、牧畜と農耕に移行する転機となった「農業革命」であり、第二は、18世紀末から19世紀初頭にかけてイギリスの産業革命とともに始まった「工業革命」である。そして第三は、私たちが立ち会った20世紀終わりの情報革命である。

工業社会と情報社会の本質的な違いのひとつとして、価値の捉え方が正反対になることが挙げられる。

具体的には、工業化社会では、ダイヤモンド、金、石油などのように希少性の高いもののほど価値が高く、逆に情報社会では、希少性の高いものは価値がない。

例えば、最初のファクスが販売されたのは1965年

ということだが、最初に購入した人は通話する相手がいないため全く価値がなく、二台目、三台目と増えるにつれその価値が高まっていく。このことを数学者は「ネットワークの価値は、構成員の二乗に比例する。」と証明した。

このネットワークの価値を人で考えると、「1人では不可能なことが、人のネットワーク（つながり）によって可能となる。」ということであり、我々技術士も密接なネットワークを築くことで、価値を指数関数的に増加させることができ得る。

9. おわりに

人はだれでも無限の可能性がある。また、私たちは可能性に満ちた北の大地に暮らし、「農耕民族」と「狩猟民族」の気質をあわせ持っている（と推測する）。さらに我々技術士は技術という揺るぎないバックボーンがあるし、北海道技術士センターというネットワークもある。

21世紀の北海道の創造にとって、我々の技術力、アイディア、そしてネットワークが未来を切り拓いていくと確信して、一人ひとりが信念と意志をもって行動すれば、きっと思い描いた未来がやってくるであろう。

そして自分たちの世代がもっと率先して頑張っていくという気持ちを強くしているところである。

最後になりますが、100号という節目に投稿の場を与えていただいたことに深く感謝するとともに、継続は力なりを実行されている広報委員会の皆さまに敬意を表します。

参考文献

- 1) 木村尚三郎、「耕す文化」の時代、ダイヤモンド社、1988
- 2) 道章（昭和42年5月1日制定）由来、北海道Webサイト



<http://www.pref.hokkaido.jp/kseikatu/ks-bsbsk/symbol.htm>

道章は、本道開拓史時代の旗章のイメージを七光星として現代的に表現したもので、きびしい風雪に耐え抜いた先人の開拓者精神と、雄々しく伸びる北海道の未来を象徴。